

# 26PB-pm297

## 軟膏混和機における混和条件の検討

○西沢 佳佑<sup>1</sup>, 長谷川 博<sup>2</sup>, 吉原 達哉<sup>3</sup>, 蠅田 稔<sup>4</sup>, 土田 和子<sup>5</sup>, 新田 剛永<sup>6</sup>, 阿部 真也<sup>6</sup>, 吉町 昌子<sup>6</sup>, 後藤 輝明<sup>6</sup> ( <sup>1</sup>ツルハ横浜日ノ出町駅前店, <sup>2</sup>ツルハ六会駅前店, <sup>3</sup>ツルハ海老名駅前店, <sup>4</sup>ツルハ大和駅前店, <sup>5</sup>ツルハ南林間駅前店, <sup>6</sup>ツルハ調剤運営本部)

【目的】ツルハドラッグ六会駅前店は皮膚科の処方箋を多数応需しており、軟膏の混合処方も多数見られる。業務の効率化を考慮し軟膏混和機を導入しているが、メーカーの推奨している、柔らかい軟膏を先に充填し 2000rpm、40 秒で混和する、という条件で混和した場合でも出来上がりの混和状態にばらつきが見られたため、理想的な混和条件を検討した。

【方法】エムアイケミカル社製のプラ壺 A-4 号 (33cc) を用い、様々な軟膏の組み合わせと混和条件で、それぞれ軟膏 15g ずつにスタンプインク 1 滴を滴下して混和し、混和の状態を上と横から確認した。

【結果】サトウザルベ軟膏 10%とアズノール軟膏、ロコイド軟膏と白色ワセリンは 2000rpm、60 秒で均一に混和していることが確認できた。またリンデロン-VG 軟膏と白色ワセリンは軟膏容器のサイズを一段階上げた 55cc において、2000rpm、60 秒の条件で均一に混和していることが確認できた。軟膏の混和には回転速度や回転時間のほか、容器の容積も関与することが確認できた。

【考察】これまででは上からの目視のみで軟膏の混和状態を判断していたが、横からの確認にて必ずしも均一な状態とは言えない場合があることが確認できた。メーカーの推奨条件、2000rpm、40 秒では十分に混和できていない場合があることが確認できたため、どの軟膏も混和可能な条件を次のように設定した。①機械の 0 設定を 2000rpm、60 秒に設定する。②混ぜ過ぎることで中央に渦のような部分ができただけの場合は、1000rpm、15 秒で再混和を行う。③可能な場合、軟膏容器のサイズを一段階大きくする。④クリーム同士の混和は 2000rpm、20 秒で混和する。⑤硬さの異なる 2 種類の場合柔らかい軟膏を先に充填する。